

「日能研文学コンクール」論説文講評

岡島 成行

最優秀賞に輝いた田中美帆さんの「命のリレー」は高校生とは思えないほどの出来栄であった。この文学コンクールが始まって以来、論説部門での初の最優秀の受賞となった。論旨の確かさや構成、文体ともにしっかりしており、審査員全員一致で最優秀賞となった。父親の仕事ぶりを冷静に観察し、その意義を考え、自分なりの論理を展開している。説得力も十分にあり、論説文として力強い作品となった。このまま成長して欲しいし、将来が期待される学生だと思う。

優秀作品に選ばれた荒木萌さんの「極悪人の命の重さ」は文章が鋭い切れ味で気持ちよく人を納得させる力があつた。短い文章の中で次々に論理展開する技術はすばらしく、詩を感じさせる論説文だった。文章のリズム、テンポ、展開が絶妙な間合いで、こちらも高校一年生とは思えない作品である。死刑廃止という結論が明確に出ていて、主張はわかりやすい。論説文の命はそこにある。最優秀作品とはまた違った切れ味がある。

奨励賞の佐藤元亮君の「命について私が思ったこと」は戦争の悲惨さを語りながら、命について考えたことを素直に綴っている。中学一年という年齢を考えるとよくできた作品だと思う。アメリカの写真家の「私の投げた一石が、小さな波紋を作り、やがてそれが、世界へと広がっていく」というフレーズに心をゆり動かされ、次なる思考につなげていく姿勢が頼もしい。

賞には漏れたが、美園生彩花さんの「生きるということ」と関根寛子さんの「いのち」はともに感受性豊かな作品で、論理を超えて人に訴えるものがある。しかし、論説文としては若干論理が弱い。感情に訴えるのは理解を求めるのに有効な手段だが、論説はまた別な能力を要する。二人とも、将来、散文の方に進むと能力を発揮できるかもしれない。特に関根さんは中学二年生でもあり、今後もぜひ応募していただきたい。その際、創作部門にも挑戦してみたらどうだろう。

今回の応募作品は比較的レベルが高く、最終選考に残った作品水準が高く、審査員も読み応えがあつた。年毎にレベルが上がるようで、今後に期待したい。

また、指導の先生の熱意も感じられ、特に学習院女子中・高等科の国語、作文指導には頭が下がる思いだ。先生方のご指導で生徒の力がぐんぐん伸びるという例だと思う。作文の力はおそらく構成力、思考力をも伸ばし、国語だけではなく他の学科の学習や活動にも大きな影響を及ぼしていると思われる。